

花物語

寺田寅彦

青空文庫

一 昼顔

いくつぐらいの時であつたかたしかには覚えぬが、自分が小さい時の事である。宅うちの前を流れている濁った堀ほり川かわに沿うて半町ぐらい上ると川は左に折れて旧城のすその茂みに分け入る。その城に向こうたこちらの岸に広いあき地があつた。維新前には藩の調練場であつたのが、そのころは県庁の所属になつたままで荒地になつていた。一面の砂地に雑草が所まだらにおい茂りところどころ昼顔が咲いていた。近辺の子供はここをいい遊び場所にして柵さくの破れから出入りしていたがとがめる者もなかつた。夏の夕

方はめいめいに長い竹ざおを肩にしてあき地へ出かける。どこからともなくたくさんの蝙蝠こうもりが蚊を食いに出て、空を低く飛びかわすのを、竹ざおを振るうてはたたき落とすのである。風のないけむったような宵よいやみ闇に、蝙蝠を呼ぶ声が対岸の城の石垣いしがきに反響して暗い川上に消えて行く。「蝙蝠来い。水飲ましょ。そつちの水にがいぞ」とあちらこちらに声がして時々竹ざおの空を切るくう力ない音がヒューと鳴っている。にぎやかなようで言い知らぬさびしさがこもっている。蝙蝠の出さかるのは宵の口で、おそくなるに従って一つ減り二つ減りどことなく消えるようにいなくなつてしまう。すると子供らも散り散りに帰って行く。あとはしんとして死んだような空気が広場をとぎしてしまふのである。いつか

塹ねぐらに迷うた蝙蝠を追うて荒れ地のすみまで行つたが、ふと気がつ
いて見るとあたりにはだれもいぬ。仲間も帰つたか声もせぬ。川
向こうを見ると城の石垣いしがきの上に鬱うつぜん然と茂つた榎えのきがやみの空に
物恐ろしく広がって汀みぎわの茂みはまつ黒に眠っている。足をあげる
と草の露がひやりとする。名状のできぬ暗い恐ろしい感じに襲わ
れて夢中に駆け出して帰つて来た事もあつた。広場の片すみに高
く小砂を盛り上げた土手のようなものがあつた。自分らはこれを
天文台と名づけていたが、実は昔の射的場の玉よけの跡であつた
ので時々砂の中から長い鉛玉を掘り出す事があつた。年上の子供
はこの砂山によじ登つてはすべり落ちる。時々戦争ごつこもやつ
た。賊軍が天文台の上に軍旗を守っていると官軍が攻め登る。自

分もこの軍勢の中に加わるのであったが、どうしてもこの砂山の頂まで登る事ができなかつた。いつもよく自分をいじめた年上の者らは苦もなく駆け上がって上から弱虫とあざける。「早く登って来い、ここから東京が見えるよ」などと言つて笑つた。くやしいので懸命に登りかけると、砂は足もとからくずれ、力草と頼む昼顔はもろくちぎれてすべりおちる。砂山の上から賊軍が手を打つて笑うた。しかしどうしても登りたいという一念は幼い胸に巢をくうた。ある時は夢にこの天文台に登りかけてどうしても登れず、もがいて泣き、母に起こされ蒲団ふとんの上になすわつてまだ泣いた事さえあつた。「お前はまだ小さいから登れないが、今に大きくなつたら登れますよ」と母が慰めてくれた。その後自分の一家は

国を離れて都へ出た。執着のない子供心には故郷の事は次第に消えて昼顔の咲く天文台もただ夢のような影をとどめるばかりであった。二十年後の今日故郷へ帰って見るとこの広場には町の小学校が立派に立っている。大きくなったら登れると思つた天文台の砂山は取りくずさされてもう影もない。ただ昔のままをとどめてなつかしいのは放課後の庭に遊んでいる子供らの勇ましさと、柵さくの根もとにかれがれに咲いた昼顔の花である。

二 月見草

高等学校の寄宿舎にはいった夏の末の事である。明けやすいと

いうのは寄宿舎の二階に寝て始めて覚えた言葉である。寝相の悪い隣の男に踏みつけられて目をさますと、時計は四時過ぎたばかりなのに、夜はしらしらと半分上げた寝室のガラス窓に明けかかって、さめ切らぬ目にはつり並べた蚊帳かやの新しいのや古い萌黄もえぎい色が夢のようである。窓の下したがまち 框かまには扁柏へんぱくの高いこずえが見えて、その上には今日ぎめたような裏山がのぞいている。床はそのままに、そつと抜け出して運動場へおりると、広い芝生しばふは露を浴びて、素足につっかけた兵隊靴へいたいぐつをぬらす。ぼつたが驚いて飛び出す羽音も快い。芝原のまわりは小松原が取り巻いて、すみのところどころには月見草が咲き乱れていた。その中を踏み散らして広い運動場を一回りするうちに、赤い日影が時計台を染めて

まかないしよ
 賄所の井戸が威勢よくきしり始めるのであつた。そのころあ
 る夜自分は妙な夢を見た。ちようど運動場のようで、もつと広い
 草原の中をおぼろな月光を浴びて現うつつともなくさまようていた。淡
 い夜霧が草の葉末におりて四方は薄絹に包まれたようである。ど
 こともなく草花のような香がするが何のにおいとも知れぬ。足も
 とから四方にかけて一面に月見草の花が咲き連なつている。自分
 と並んで一人若い女が歩いているが、世の人と思われぬ青白い顔
 の輪郭に月の光を受けて黙つて歩いている。薄鼠色うすねずみいろの着物の
 長くひいた裾すそにはやはり月見草が美しく染め出されていた。どう
 してこんな夢を見たものかそれは今考えてもわからぬ。夢がさめ
 てみるとガラス窓がほのかに白んで、虫の音が聞こえていた。寝

汗が出ていて胸がしぼるような心持ちであった。起きるともなく床を離れて運動場へおりて月見草の咲いているあたりをなんべんとなくあちこちと歩いた。その後も毎朝のように運動場へ出たが、これまでにここを歩いた時のような爽そうかいやかな心持ちはしなくなつた。むしろ非常にさびしい感じばかりして、そのころから自分は次第にわれとわが身を削るような、憂鬱ゆううつな空想にふけるようになってしまった。自分が不治の病を得たのもこのころの事であった。

三 栗の花

三年の間下宿していた吉住よしずみの家は黒髪山くろかみやまのふもともやや奥まった所である。家の後ろは狭い裏庭で、その上はもうすぐに崖がけになつて大木の茂りがおおい重なっている。傾く年の落ち葉木の実といつしよひよどりに鶉ひよどりの鳴き声も軒ばに降らせた。自分の借りていた離れから表の門への出入りにはぜひとこの裏庭を通らねばならぬ。庭に臨んだ座敷のはずれに三畳敷きばかりの突き出た小室こへやがあつて、しやれた丸窓があつた。ここは宿の娘の居間ときまつていて、丸窓の障子は夏も閉じられてあつた。ちようどこの部屋へやの真上に大きな栗くりの木があつて、夏初めの試験前の調べが忙しくなるころになると、黄色い房紐ふさひものような花を屋根から庭へ一面に降らせた。落ちた花は朽ち腐れて一種甘いような強い香気が小庭

に満ちる。ここらに多い大きな蠅はえが勢いのよい羽音を立ててこれに集まっている。力強い自然の旺おうせい盛な気が脳を襲うように思われた。この花の散る窓の内には内気な娘がたれこめて読み物や針仕事のけいこをしているのであった。自分がこの家にはじめて来たところはようよう十四五ぐらいで桃割れに結うた額髪をたらせていた。色の黒い、顔だちも美しいというのではないが目の涼しいどこかかわいげな子であった。主人夫婦の間には年とつても子が無いので、親類の子供をもらって育てていたのである。娘のほかには大きな三毛ねこがいるばかりでむしろさびしい家庭であった。自分はいつも無口な変人と思われていたくらいで、宿の者と親しいむだ話をする事もめつたになければ、娘にもやさしい言葉をか

けたこともなかった。毎日の食事時にはこの娘が駒下駄こまげたの音をさせて迎えに来る。土地のなまった言葉で「御飯おあがんなさいまつせ」と言い捨ててすたすた帰って行く。初めはほんの子供のように思っていたが一夏一夏帰省して来るごとに、どことなくおとなびて来るのが自分の目にもよく見えた。卒業試験の前のある日、灯ひともしごろ、復習にも飽きて離れの縁側へ出たら栗くりの花の香は慣れた身にもしむようであった。主家おもやの前の植え込みの中に娘が白っぽい着物に赤い帯をしめてねこを抱いて立っていた。自分のほうを見ていつにない顔を赤くしたらしいのが薄暗い中にも自分にわかった。そしてまともにこつちを見つめて不思議な笑顔えがおをもらしたが、物に追われでもしたように座敷のほうに駆け込んで行

った。その夏を限りに自分はこの土地を去つて東京に出たが、翌年の夏初めごろほとんど忘れていた吉住よしずみの家から手紙が届いた。娘が書いたものらしかった。年賀のほかにはたよりを聞かせた事もなかったが、どう思うたものか、こまごまとかの地の模様を知らせてよこした。自分の元借りていた離れはその後だれも下宿していないそうである。東京という所はさだめてよい所であろう。一生に一度は行ってみたいというような事も書いてあつた。別になんという事もないがどことなくなまめかしいのはやはり若い人の筆だからであろう。いちばんおしまいに栗くりの花も咲そき候ころう。やがて散り申し候とあつた。名前は母親の名が書いてあつた。

四　　のうぜんかずら

小学時代にいちばんきれいな学科は算術であつた。いつでも算術の点数が悪いので両親は心配して中学の先生を頼んで夏休み中先生の宅へ習いに行く事になつた。宅うちから先生の所までは四五町もある。宅うちの裏門を出て小川に沿うて少し行くと村はずれへ出る、そこから先生の家の高い松が近辺の藁屋根わらやねや植え込みの上にそびえて見える。これにのうぜんかずらが下からすきまもなくからんで美しい。毎日昼前に母から注意されていやいやながら出て行く。裏の小川には美しい藻もが澄んだ水底にうねりを打って揺れている。その間を小鮎こぶなの群れが白い腹を光らせて時々通る。子供らが丸裸

の背や胸に泥を塗どろつては小川へはいつてボチャボチャやっている。付け木の水車を仕掛けているのもあれば、鹽たらいぶね船に乗つて流れて行くのもある。自分はうらやましい心をおさえて川沿いの岸の草をむしりながら石盤をかかえて先生の家へ急ぐ。寒竹の生けがきをめぐらした冠木門かぶきもんをはいると、玄関のわきの坪には蓆むしろを敷き並べた上によく繭を干してあつた。玄関から案内を請うと色の黒い奥さんが出て来て「暑いそうじのによろ御精が出来ますねえ」といつて座敷へ導く。きれいに掃除そうじの届いた庭に臨んだ縁側近く、低い机を出してくれる。先生が出て来て、黙つて床の間の本棚ほんだなから算術の例題集を出してくれる。横に長い黄表紙で木版刷りの古い本であつた。「甲乙二人の旅人あり、甲は一時間一里を歩み乙は

一里半を歩む……」といったような題を読んでその意味を講義して聞かせて、これをやってごらんといわれる。先生は縁側へ出てあくびをしたり勝手のほうへ行つて大きな声で奥さんと話をしたりにしている。自分はその問題を前に置いて石盤の上で石筆をコツコツいわせて考える。座敷の縁側の軒下に投網とあみがつり下げられて、長押なげしのようなものに釣竿つりざおがたくさん掛けてある。何時間で乙の旅人が甲の旅人に追いつくかという事がどうしてもわからぬ、考えていると頭が熱くなる、汗がすわっている足にじみ出て、着物のひつつくのが心持が悪い。頭をおさえて庭を見ると、笠かささまつ松の高い幹にはまっかなのうぜんの花が熱そうに咲いている。よい時分に先生が出て来て「どうだ、むつかしいか、ドレ」とい

つて自分の前へすわる。ラシヤ切れを丸めた石盤ふきですみからすみまで一度ふいてそろそろ丁寧に説明してくれる。時々わかつたかわかつたかと念をおして聞かれるが、おおかたそれがよくわからぬので妙に悲しかった。うつ向いていると水^{みず}湧^{ぼな}が自然にたれかかつて来るのをじつところえている、いよいよ落ちそうになると思い切つてすすり上げる、これもつらかった。昼飯時が近くなるので、勝手のほうでは皿^{さら}鉢^{ばち}の音がしたり、物を焼くにおいがしたりする。腹の減るのもつらかった。繰り返して教えてくれない、結局あまりよくはわからぬと見ると、先生も悲しそうな声を少し高くすることがあった。それがまた妙に悲しかった。「もうよろしい、またあしたおいで」と言われると一日の務めがとも

かくもすんだような気がして大急ぎで帰って来た。宅うちでは何も知らぬ母がいろいろ涼しいごちそうをこしらえて待っていて、汗だらけの顔を冷水で清め、ちやほやされるのがまた妙に悲しかった。

五 芭蕉の花

晴れ上がって急に暑くなった。朝から手紙を一通書いたばかりで何をする元気もない。なんべんも机の前へすわって見るが、じきに苦しくなつてついねそべつてしまう。時々涼しい風が来て軒のガラスの風鈴が鳴る。床の前には幌蚊帳ほろがやの中に俊坊が顔をまつかにして枕まくらをはずしてうつむきに寝ている。縁側へ出て見ると庭

はもう半分陰になって、陰と日向の境を蟻ありがうろうろして出入りしている。このあいだ上田うえだの家からもらつて来たダーリアはどうしたものか少し芽を出しかけたままで大きくならぬ。戸袋の前に大きな広葉を伸ばした芭蕉ばしやうの中の一株にはことし花が咲いた。大きな厚い花卉が三つ四つ開いたばかりで、とうとう開ききらずに朽ちてしまうのか、もう少ししなびかかったようである。蟻ありが二三匹たかっている。俊坊が急に泣き出したからのぞいて見ると蚊帳かやの中にすわつて手足を投げ出して泣いている。勝手から妻が飛んでくる。坊は牛乳のびんを、投げ出した膝の上で自分にかかえて乳首から息もつかずごくごく飲む。涙でくしゃくしゃになつた目で両親の顔を等分にながめながら飲んでゐる。飲んでしまふ

とまた思い出したように泣き出す。まだ目がさめきらぬと見える。妻は俊坊をおぶって縁側に立つ。「芭蕉ばしやうの花、坊や芭蕉の花が咲きましたよ、それ、大きな花でしょう、実がなりますよ、あの実は食べられないかしら。」坊は泣きやんで芭蕉の花をさして「モ、モ、」という。「芭蕉は花が咲くとそれきり枯れてしまうつておとうちやま、ほんとう？」「そうよ、だが人間は花が咲かないでも死んでしまうね」といったら妻は「マア」といったきり背をゆすぶっている。坊がまねをして「マア」という。二人で笑ったら坊もいっしょに笑った。そしてまた芭蕉の花をさして「モ、モ、」といった。

六 野ばら

夏の山路を旅した時の事である。峠を越してから急に風が絶えて蒸し暑くなつた。狭い谷間に沿うて段々に並んだ山田の縁を縫う小道には、とんぼの羽根がぎらぎらして、時々蛇がへび行く手からはい出す。谷をおおう黒ずんだ青空にはおりおり白雲が通り過ぎるが、それはただあちこちの峰に藍あいいろ色の影を引いて通るばかりである。咽喉のどがかわいて堪え難い。道ばたの田の縁に小みぞが流れているが、金気を帯びた水の面は青い皮を張つて鈍い光を照り返している。行くうちに、片側の茂みの奥から道を横切つて田に落つる清水しみずの細い流れを見つけた時はわけもなくうれしかった。

すぐに草鞋わらじのまま足を浸したら涼しさが身にしみた。道のわきに少し分け入ると、ここだけは特別に樗かしや櫓ならがこんもりと黒く茂っている。苔こけは湿って蟹かにが這ほうている。崖がけからしみ出る水は美しいしだ。羊歯の葉末からしたたつて下の岩のくぼみにたまり、余った水はあふれて苔の下をくぐって流れる。小さい竹柄杓たけびしゃくが浮いたままにしずくに打たれている。自分は柄杓にかじりつくようにして、うまい冷たいはらわたにしむ水を味おうた。少し離れた崖の下に一株の大きな野ばらがあつて純白な花が咲き乱れている。自分は近寄つて強いかおりをかいで小さい枝を折り取つた。人のけはいがするのでふと見ると、今までちつとも気がつかなくつたが、茂みの陰に柴刈しばかりの女が一人休んでいた。背負うた柴がけを崖にもたせ

て脚^{きやはん}絆の足を投げ出したままじつとこつちを見ていた。あまり
思いがけなかつたので驚いて見返した。継ぎはぎの着物は裾^{すそ}短^{みじ}
かで繩^{なわ}の帯をしめている。白い手ぬぐいを眉^{まゆ}深^かにかぶつた下から
黒髪が額にたれかかっている。思いもかけず美しい顔であつた。
都では見ることできぬ健全な顔色は少し日に焼けていつそう美
しい。人に臆^{おく}せぬ黒いひとみでまともに見られた時、自分はなん
だかどがめられたような気がした。思わずいくじのないお辞儀を
一つしてここを出た。蝉^{せみ}が鳴いて蒸し暑さはいっそうはげしい。
今折って来た野ばらをかきながら二三町行くと、向こうから柴を
負うた若者が一人上つて来た。身のたけに余る柴を負うてのそり
のそりあるいて来た。たくましい赤黒い顔に鉢^{はち}巻^{まき}をきつくしめ

て、腰にはとぎすました鎌かまが光っている。行き違う時に「どうもお邪魔さまで」といって自分の顔をちらと見た。しばらくして振り返って見たら、若者はもう清水しみずのへん近く上がっていたが、向こうでも振りかえってこつちを見た。自分はなんというわけなしに手に持っていた野ばらを道ばたに捨てて行く手の清水へと急いで歩いた。

七 常山の花

まだ小学校に通かよったころ、
 昆こんちゆう虫ちゆうを集める事が友だち仲間ではやった。自分も母にねだって蚊帳かやの破れたので捕虫網を作って

もらつて、土用の日盛りにも恐れず、これを肩にかけて毎日のように虫捕りに出かけた。蝶蛾や甲虫類のいちばんたくさんに棲んでゐる城山しろやまの中をあちこちと長い日を暮らした。二の丸三の丸の草原には珍しい蝶やばったがおびただしい。少し茂みに入ると樹木の幹にさまざまの甲虫が見つかる。玉虫、こがね虫、米つき虫の種類がかずかずいた。強い草木の香にむせながら、胸をおどらせながらこんな虫をねらつて歩いた。捕つて来た虫は熱湯や樟脳しょうのうで殺して菓子折りの標本箱へきれいに並べた。そうしてこの箱の数の増すのが楽しみであった。虫捕りから帰つて来ると、からだは汗を浴びたようになり、顔は火のようであった。どうしてあんなに虫好きであつたらうと母が今でも昔話の一つに

数える。年を経ておもしろい事にも出会うたが、あのころ珍しい虫を見つけて捕えた時のような鋭い喜びはまれである。今でも城山の奥の茂みに蒸された朽ち木の香を思い出す事ができるのである。いつか城山のずつとすそのお堀ほりに臨んだ暗い茂みにはいったら、一株の大きな常山木じょうざんぼくがあつて桃色がかつた花がこずえを一面におおうていた。散つた花は風にふかれて、みぎわに朽ち沈んだ泥船どろぶねに美しく散らばつていた。この木の幹はところどころ虫の食い入った穴があつて、穴の口には細かい木くずが虫の糞ふんと共にこぼれかかつて一種の臭気が鼻を襲うた。木の幹の高い所に大きなみごとなかぶと虫がいかめしい角つのを立てて止まつているのを見つけた時はうれしかった。自分の標本箱にはまだかぶと虫の

よいのが一つもなかったの、胸をとどろかして網を上げた。少し網が届きかねたがようよう首尾よく捕れたので、腰につけていた虫かごに急いで入れて、包みきれぬ喜びをいだいて森を出た。三の丸の石段の下まで来ると、向こうから美しい蝙蝠傘をさした女が子供の手を引いて木陰を伝い伝い来るのに会った。町の良家の妻女であつたろう。傘を持った手に葉びんをさげて片手は子供の手を引いて来る。子供は大きな新しい麦藁帽の紐をかわいい頤あごにかけてまっ白な洋服のようなものを着ていた。自分のさげていた虫かごを見つけると母親の手を離れてのぞきに来たが、目を丸くして母親のほうへ駆けて行って、袖そでをぐいぐい引っぱつていると思うと、また虫かごをのぞきに来た。母親は早くおいで

よと呼ぶけれども、なかなか自分のそばを離れぬ。しいて連れて行くこうとすると道のまん中にしゃがんでしまつてとうとう泣き出した。母親は途方にくれながらしかつてゐる。自分はその時虫かごのふたをあけてかぶと虫を引き出し道ばたの相撲取草を一本すもうとりぐさ抜いて虫の角をつのしつかり縛つた。そして、さあといつて子供に渡した。子供は泣きやんできまりの悪いようにうれしい顔をする。母親は驚いて子供をしかりながらも礼をいうた。自分はなんだかきまりが悪くなつたから、黙つてからになつた虫かごを打ちふりながら駆け出したが、うれしいような、惜しいような、かつて覚えぬ心持ちがした。その後たびたび同じ常山木じょうざんぼくの下へも行ったが、あの時のようなみごとなかぶと虫はもう見つからなかつ

た。またあの時の親子にも再び会わなかった。

八 りんどう

同じ級に藤野ふじのというのがいた。夏期のエキスカーションに演習林へ行く時によく自分と同じ組になって測量などやって歩いた。見ても病身らしい、背のひよろ長い、そしてからだのわりに頭の小さい、いつも前かがみになって歩く男であった。無口で始終何かぼんやり考え込んでいるようなふうで、他の一般に快活な連中からはあまり歓迎されぬほうであった。しかしごく気の小さい好人物で柔和な目にはどこやら人を引く力はあった。自分はこの男

の顔を見ると、どういふわけか気の毒なというような心持ちがした。この男の過去や現在の境遇などについては当人も別に話した事はなし、他からも聞いた事はなかったが、何となしに不幸な人という感じが、初めて会った時から胸に刻みつけられてしまった。ある夏演習林へ林道敷設の実習に行った時の事である。藤野のほかに三四人が一組になって山小屋に二週間起臥きがを共にした。山小屋といつても、山の崖がけに斜めに丸太を横に立てかけ、その上を蓆むしろや杉葉すぎばでおおうた下に板を敷いて、めいめいに毛布にくるまってごろごろ寝るのである。小屋のすみに石を集めた竈かまどを築いて、ここで木こりの人足が飯をたいてくれる。一日の仕事から帰って来て、小屋から立ちのぼる青い煙を岨道そばみちから見上げるのは愉快で

あつた。こんな小屋でも宅へ帰つたような心持ちになる。夜になると天井の丸太からつるしたランプの光に集まる虫を追いながら、必要な計算や製図をしたり、時にはビスケットの罐をまん中に、みんなが腹ばいになってむだ話をする事もある。いつもよく学校のおうわさや教授たちのまねが出てにぎやかに笑うが、またおりおり若やいだなまめかしいような話の出る事もあつた。こんな時藤野は人の話を聞かぬでもなく聞くでもなく、何か不安の色を浮かべて考えているようであるが、時々かくしから手慣れた手帳を出してらく書きをしている。一夜夜中に目がさめたら山はしんとして月の光が竈の所にさし込んでいた。小屋の外を歩く足音がするから、蓆のすきからのぞいて見ると、青い月光の下で藤野がぶら

りぶらり歩いていた。毎朝起きるときまきつた味噌汁みそじるをぶつかけた飯を食つてセオドライトやポールをかついで出かける。目的の場所へ着くと器械をすえてかわるがわる観測を始める。藤野は他人の番の時には切り株に腰をかけた草の上になころんだりしていつものように考え込んでいるが、いよいよ自分の番になると急いで出て来て器械をのぞき、熱心に度盛りを読んでいるが、どういふものか時々とんでもない読み違いをする。ノートを控えている他の仲間から、それではあんまりちがうようだがと注意されて読み違えたことに気がつく、顔をまっかにして非常に恥じておどおどする。どうも失敬した失敬したと言ひ訳をする。なるべく藤野には読ませぬようにしたいとだれも思つたらうが、そうい

うわけにも行かぬのでやはり順番で読ませる。すると五回に一度は何かしら間違えてそのたびに非常に恥じて悲しい顔をする。そしてズボンのひぎをかかえていつそう考え込むのである。こんなふうで二週間もおおかた過ぎ、もう引き上げて帰ろうという少し前であつたらう。一日大雨がふつて霧が渦巻うずまき、仕事も何もできないので、みんな小屋にこもつて寝ていた時、藤野の手帳が自分のそばに落ちていたのをなんの気なしに取り上げて開いて見たら、山におびただしいりんどうの花が一つしおりにはさんであつて、いろんならなく書きがしてあつた。中に銀杏いちようがえしの女の頭がいくつもあつて、それから Fate という字がいろいろの書体でたくさん書き散らしてあつた。仰向きに寝ていた藤野が起き上がつて

それを見ると、青い顔をしたが何も言わなかった。

九 棟の花

一夏、脳が悪くて田舎いなかの親類のやつかいになつて一月ぐらい遊んでいた。家の前は清い小みぞが音を立てて流れている。狭い村道の向こう側は一面の青田で向こうには徳川以前の小さい城跡の丘が見える。古風な屋根門のすぐわきに大きな棟おうちの木が茂つた枝を広げて、日盛りの道に涼しい陰をこしらえていた。通りがかりの行商人などがよく門前で荷をおろし、門流れで顔を洗うたぬれ手ぬぐいを口にくわえて涼んでいる事がある。一日暑い盛りに門

へ出たら、木陰で桶屋おけやが釣瓶つるべや桶のたがをはめていた。きれいに掃いた道に青竹の削りくずかんなや鉋くずが散らばって棟おうちの花がこぼれている。桶屋は黒い痘痕とうこんのある一癖ありそうな男である。手ぬぐい地の肌着はだぎから黒い胸毛を現わしてたくましい腕に木槌こづちをふるうている。槌の音が向こうの丘に反響して静かな村里に響き渡る。稲田には強烈な日光がまぶしいようにさして、田んぼは暑さに眠っているように見える。そこへ羅宇屋らうやが一人来て桶屋おけやのそばへ荷をおろす。古いそして小さすぎて胸の合わぬ小倉こくらの洋服に、腰から下は股引ももひき脚絆きやはんで、素足に草鞋わらじをはいている。古い冬の中折れを眉深まぶかに着ているが、頭はきれいに剃そった坊主らしい。「きょうも松魚かつおが捕とれたのう」と羅宇屋が話しかける。桶屋は「捕れた

かい、このごろはなんぼ捕れても、みんな蒸気で上へ積み出すからこちらの口へははいらんわい」とやけに桶をポンポンたたく。門の屋根裏に巣をしているつばめが田んぼから帰って来てまた出て行くのを、羅宇屋は煙管きせるをくわえて感心したようにながめていたが「鳥でもつばめぐらい感心な鳥はまずないね」と前置きしてこんな話を始めた。村のある旧家につばめが昔から巣をくうていたが、一日家の主人がつばめに「お前には長年うちで宿を貸しているが、時たまにはみやげの一つも持って来たらどうだ」と戯れに言った事があつた。そしたら翌年つばめが帰って来た時、ちょうど主人が飯を食っていた膳ぜんの上へ飛んで来て小さな木の実を一粒落とした。主人はなんの気なしにそれを庭へほうり出したら、

まもなくそこから奇妙な木がはえた。だれも見た事もなければ聞いた事もない不思議な木であった。その木が生長すると枝も葉も一面に気味の悪い毛虫がついて、見るもあさましいようであったので主人はこの木を引き抜いて風呂ふろのたきつけに切つてしもうた。その時ちようど町の医者が通りかかつて、それは惜しい事をしたと嘆息する。どうしてかと聞いてみると、それはわが国では得がたい麝じゃこう香こうというものであつたそうなの。ここまで一人でしゃべつてしまつてもつともらしい顔をして煙を輪に吹く。ポンポン桶をたたきながら黙つて聞いていた桶屋おけやはこの時ちよつと自分のほうを見て変な目つきをしたが、「そしてその麝じゃこう香こうというのはその木の事かい、それともまた毛虫かい」と聞く、「ウーン、そりや

あその、麝香にもまたいろいろ種類があるそうでのう」と、どちらともわからぬ事をいう。桶屋はしいて聞こうともせぬ。桶をたたく音は向こうの丘に反響して棟の花がほろほろこぼれる。

(明治四十一年十月、ホトトギス)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

※「芭蕉は花が咲くと」は、底本では「芭蕉は花が咲くと」ですが、親本を参照して直しました。

入力：田辺浩昭

校正：田中敬三

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花物語

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>